

## 証（あかし）

札幌市医師会  
コロンビア内科

小谷 晃司

流れ流れて北海道に辿り着いた自分に墓は要らない。似つかわしくもない。この世は間借りだ。王将の駒も歩の駒も、対局が終われば仕舞われるのは同じ箱。私が世を去った後、もし誰か手を合わせてくれようという者があるならば、そこが海であれ山であれ、勝手な方角を向いてひととき思い出してくれればそれで十分だ。墓や葬儀に高いお金をかけるなら、その金で孫に積み木でも買ってやってほしい。それが私の美学であったし、基本的には今も変わらない。ただ、その一方で齢を重ねるごとに年々強くなる葛藤がある。自分は誰なのか。最近はやたらと二人の娘を郷里に連れていく。私の兄や父が眠る墓に参ったあと、近所の神社で曾祖父の寄進した釣り灯籠を見上げて刻まれている名前を確かめさせる。針金の先で風に揺られるのは透かし彫りのアンチノミー。

2019年、北海道大学医学部が創立100周年を迎える。目下100周年記念事業に向けて、寄付金が募られている。個人で20万円寄付すると旧・理学部の博物館とキャンパス内に新設される百年記念館にそれぞれ銘板が掲示されると聞いて、私は完全に閃いた。この銘板はきっと私がここにいたことをちょうどよい謙虚さで語ってくれる。二人の娘やその子供たちは、私を思い出した時や自分が分からなくなった時、その銘板を指でなぞるだろう。手元にクレジットカードを用意して「北海道大学フロンティア基金」のページを開き、寄付目的の項目で「医学部100周年記念事業」を選択。iPadを10分ほども操作して、私は墓標を手に入れた。

こうして最低限の自分の始末をしたつもりになり、ところで妻はどうだろう。私と銘板を並べるのはお断りと言うだろうか。樹木葬や散骨を選ぶだろうか。実家の墓にでも混ざるとか。まだ聞けていない。でも、今回の終活気分がよく分かった。私は妻を愛している。もちろん娘たちのことも。みんな、本当にどうもありがとう。君たちが、私が生きた証（あかし）です。

## ビルロートとブラームス（補遺）

札幌市医師会  
札幌東豊病院

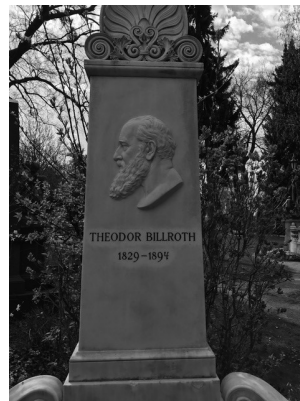
若松 章夫

北海道医報1195号に、北海道労働保健管理協会の真鍋邦彦先生が、ビルロートとブラームスについて書かれていた。本年4月休暇を貰って、ウイーン国立歌劇場で行われたワーグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』のチクルスを見に行った折、ウイーンの中央墓地に行き、ビルロートとブラームスの墓参をしてきた。ウイーンの中央墓地は2.5km<sup>2</sup>の広大な敷地面積を持ち、中心部に特別名誉市民地区の墓地と著名な音楽家の墓地がある。

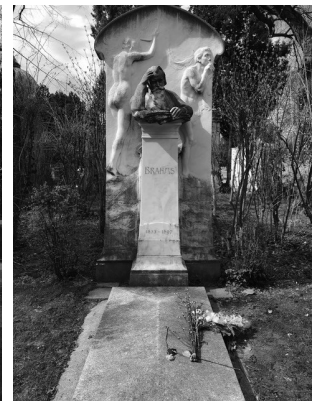
ビルロートの墓は、特別名誉市民地区の一画にあり、ブラームスの墓は、音楽家の墓の一画にあり、ベートーベンやシューベルトの墓と並んでいる。ビルロートの墓からブラームスの墓までは「スープの冷めない」距離の徒歩数分のところにある。

ビルロートという名前は「国試に出るかもしれないから名前くらいは覚えておくように」という外科の先輩の示唆で、かろうじて覚えていたので、写真を撮った。ブラームスと親交があったなどとはつゆしらず、真鍋先生の記述によって初めて知った次第である。

晩年は反目し合った二人らしいが、墓は本当に近くにあり、あの世で旧交を温めているのかもしれない。



ビルロートの墓



ブラームスの墓